日本福祉大学福祉社会開発研究所『日本福祉大学研究紀要－現代と文化』
第147号　2023年9月

「社会福祉発達史」研究の射程と展望（その3）

―― ポピュラー・ソーシャルワークとは何か？ ――

伊　藤　文　人

要　旨

本稿の目的は，ポピュラー・ソーシャルワーク Popular social work 研究の到達点を整理し，その意義を考察することである．ポピュラー・ソーシャルワークとは，「近代的主体」として表象されてこなかった下層／従属階級たる「民衆」が育んだ独自の社会福祉実践を指す．

ポピュラー・ソーシャルワーク研究は，現代の専門職化された「ソーシャルワーク」（実在性と言説）への単線的／一次元的な理解を批判することから出発しながらその代替的形態の提示を試みているが，世紀転換期英国における民衆主体の社会福祉実践（「民衆」に内在する「自助」概念とその発露形態）を歴史的な先駆者として位置づけることで，これまで社会福祉／ソーシャルワーク史研究が依拠してきた歴史観／記述 historiography を相対化している．それはまた民間／ボランティアセクターの多様な福祉活動を描き出す「福祉の複合史」研究への批判をも提起していると評価できるものである．

本稿は，「福祉の複合史」研究が開拓した「福祉複合体」とは異なる階級的基盤から成る社会福祉実践の内実に焦点を当てることで同時期の社会福祉史の一端に接近し，当時の福祉（welfare）をめぐる主体や行為に関わる言説や歴史的表象にまつわる「意味を巡る闘争の空間」を考察している．

キーワード：ポピュラー・ソーシャルワーク，複合史研究，シチズンシップとリスペクタビリティ，エージェンシー／アクター，歴史観／記述と表象

目　次

はじめに
1　ポピュラー・ソーシャルワーク登場の歴史的文脈
　――リスペクタビリティを巡る階級的攻防
1.1　世紀転換期の「アソシエーション文化」とシチズンシップ／リスペクタビリティ

1.2　リスペクタビリティの労働者階級への浸透
1.3　世紀転換期の政治動向——リスペクタビリティを巡る自由主義と社会主義
2　ポピュラー・ソーシャルワーク研究が対象化された社会的／学術的背景
2.1　現代ソーシャルワークへの批判としてのポピュラー・ソーシャルワーク
2.2「専門的ソーシャルワーク」の含意している歴史観／記述 historiography
2.3　ポピュラー・ソーシャルワークの意味と特色
——実践の前提としての「自助」概念
3　考察と展望
3.1　もうひとつの社会と社会福祉／ソーシャルワーク
3.2　ポピュラー・ソーシャルワーク（研究）は，どのような歴史観・記述 historiography を提供したか？
3.3「民衆」とは誰なのか？
注
文献

はじめに

本稿の目的は，現代のマルクス主義[1]史観に依って立つ英国の社会福祉研究者たるマイケル・ラヴァレット，クリス・ジョーンズ，トニー・ノヴァク，イアン・ファーガスン，ヴァセリ・イオキミダスらによって開拓されたポピュラー・ソーシャルワーク popular social work 研究の到達点を整理し，その意義を考察するものである．

ポピュラー・ソーシャルワークとは，英国ソーシャルワークの「ラディカルな伝統」（Ferguson 2008=2012, ch.6）や「ラディカルな核心 radical kernel」（Ferguson and Lavalette, 2007; Ferguson and Woodward 2009）に端を発する，「近代的主体」（≒応答可能性を有する）**ではないもの**として表象されやすい／されてこなかった下層／従属階級たる「民衆」が育んだ独自の社会福祉実践を指し，その過去から現代へ至る実践形態を意味する．ここでいう「ポピュラー[2]（民衆の）」とは，「リスペクタビリティ respectability」（自由社会を支える社会的市民性（シチズンシップ） social citizenship を体現する望ましさや徳性を持つ近代的主体像）を受容／内面化した男性基幹労働者の範疇に含まれなかった女性・児童・障害者・移民らを含めた（下層）労働者／従属階級を包含しており，また彼らの行為主体性 agency を指している．さらにこの実践は，ラヴァレットやファーガスンらが長年追究している「ラディカルなソーシャルワーク Radical social work」の歴史的な源流にも位置づけられている．

本稿では，このポピュラー・ソーシャルワーク研究の意義についての考察を「福祉の複合構制史研究 the Mixed Economy of Welfare（以下，複合史研究）」と比較対照する形で実施していく（伊藤 2022）．ここでいう複合史研究は，1870 年代から 1940 年代における「アソシエーショ

ン（自発的結社・任意団体）」から生じた民間福祉活動を正当化した思想たる「介入的自由主義」（小野塚編 2009）を可能ならしめた構成要件としての「福祉ボランタリズム」／「福祉複合体」（高田 2001; 高田 2009; 岡田・高田・金澤編 2012; 高田・中野編 2012; 高田 2017）から描かれる社会福祉史研究を指している．

複合史研究は，1980 年代まで主流化していた社会福祉史研究（≒日本では社会事業史研究）を福祉国家 the welfare state の成立（＝国家福祉の強調）に収斂させるかのような（ある種の目的論的なプロット plot を有する）単線的な歴史観／記述 historiography によるものと強く批判することから登場した．複合史研究は「社会的および倫理的な『よきありかた』wellbeing」（深貝 2009: 255）という目的を達成する一つの手段として福祉 welfare を捉え，それをアソシエーション文化による「福祉ボランタリズム」から生まれた福祉供給主体（各種チャリティ組織や友愛組合のような互助組織）の複合的・多元的な変遷から構成されるものとして理解する．これまでの複合史研究にとっての福祉とは，官民の連携（国家による民間福祉活動条件への助成や規制）によって，市民としての「立派さ／望ましさ」を意味するリスペクタビリティを受容した労働者がその生活上のニーズを充足するために加入した多様な互助組織による民間レベルの広範な支援網を中核とする「福祉複合体」から提供される，「リスペクタビリティと両立可能であった福祉」（リスペクタビリティが福祉受給の規準）であった（山本 2020: 24）．こうした理解から従来の社会福祉史研究は国家主導の福祉（the state welfare）に収斂するかのような歴史観／記述に依拠しており，それは極めて不充分な歴史像しか提供していないというのが複合史研究の主張になる．

しかしながら，複合史研究がこのように wellbeing を達成する手段として welfare を位置づけるならば，その目的や方法の内実は異なるものの，歴史的実在としてのポピュラー・ソーシャルワークも「よきありかた（善き在り方）」としての wellbeing という目的を達成する手段としての welfare を追究した「担い手」（agency ないし actor）であったことは，少しも驚くべきではない史実だと指摘できよう．

次にポピュラー・ソーシャルワークの実践は，元々は下層（労働者）／従属階級による，コミュニティにおける自発的な日常生活を支える相互扶助活動に，「介入的自由主義」とは異なる目的を実現させるために生じた社会運動が融合する形で形成されたと考えられている．それは「福祉ボランタリズム」の示すような福祉の提供形態でなかったかも知れないため，その実践形態や構成要素が異なっている点に留意する必要があるといえよう．

最後に，社会福祉史研究の中心的な課題が様々な「行為主体／担い手 agency／actor」によって提供されてきた福祉活動・実践を発掘し，その内実を豊かに叙述する，すなわち，行為主体／担い手と社会福祉の歴史的構築過程との関係から歴史を捉える（Lavalette and Mooney 2000: 2-5）ことであるならば（それは複合史研究の核心的な主張でもある），その「行為主体／担い手」の中には，リスペクタビリティを受容した者以外も当然ながら存在したことを史実としてきちんと位置づけ直すことが要請されることになろう．このことは別稿（伊藤 2022）で触れたように，

社会福祉史研究における歴史観／記述 historiography を意識した上で歴史を叙述することの意味を掘り下げる必要性を提起しており，強調されてよいと思われる．

以上から本稿では，ポピュラー・ソーシャルワーク研究の到達点と意義を考察するにあたって，それが登場する歴史的文脈を，複合史研究が重視した世紀転換期のアソシエーション文化やリスペクタビリティをめぐる相克状況として捉え（第 1 章），ポピュラー・ソーシャルワーク研究者による現代的な問題意識やスタンスを整理した上で（第 2 章），最後に，これらの整理から示唆されるいくつかの課題となる論点を考察していくことにしたい（第 3 章）．

1　ポピュラー・ソーシャルワーク登場の歴史的文脈
――リスペクタビリティを巡る階級的攻防

本稿の目的を明らかにしていく前提として，世紀転換期（1880 年代から 1920 年代）英国社会の歴史的文脈に触れておく必要があるだろう．それは複合史研究の中核対象たるアソシエーションによる「福祉複合体」を構成する各供給主体の動向と関連して，あるいはそれとの対抗関係のなかでポピュラー・ソーシャルワークが登場 emergence してきたことと関係している．この当時に増大した民間団体の諸形態は，社会的シチズンシップ／リスペクタビリティという社会的価値観を基幹労働者階級（熟練工）へ普及させる強力な手段として機能した．そこでは「克己，倹約，勤勉等の生活態度を涵養し，また生産協同組合を通じて企業家精神やパートナーシップを経験させる教育の場・機会としても期待された」（小野塚 2009: 17-18）といわれるが，ポピュラー・ソーシャルワークは，これに包含されえなかった「民衆」を主体にした独自の階級意識や文化に根ざした社会福祉実践として歴史に登場したといえるだろう．

1.1　世紀転換期の「アソシエーション文化」とシチズンシップ／リスペクタビリティ

小関（2000: 10-13）は，世紀転換期の英国社会をどう捉えるかという問いへのひとつの回答は，当時爆発的に増加した任意団体／自発的結社たるアソシエーションが提供した様々な市民活動の内実とそれを支える社会的価値観たる社会的シチズンシップやリスペクタビリティという概念との関係性を検討することであるという．こうした任意団体の性格を最大公約数的に表現するなら，①国家や公権力機関から独立した民間団体であること，②外部の援助を仰ぐこともあるが原則的にセルフ・メイドの組織であること，③明確な目的をもち，明文化された規約（メンバーシップ）に基づいて運営されること，④コミットメントが限定的であり，誰でも気楽に参加できたことであったという．このような任意団体の原型は 19 世紀以前の「コーヒーハウス」などにも見出せるが，19 世紀になるとそれは「市民的公共性」の具体的表現としてさらなる意識化がなされた．当初は中産階級が中核的な担い手になっていたが，資本主義／工業化の発展（余暇時間の増大と余暇活動の選択肢増大，可処分所得の増大，社会の世俗化など）は労働者階級の形成にも寄与したので，労働者階級による任意団体も中産階級による規約や運営原則を踏襲しながら

成長し，結果的に一部の例外を除いて，「何らかの任意団体へのアクセスを持たない者はほとんどいなかった」ため，アソシエーション文化は英国社会へ定着していったのである．

このアソシエーション文化を支えた社会的価値観がリスペクタビリティである．山本（2020: 1-2）によれば，それは特に世紀転換期の英国において「社会的シチズンシップ／市民性」（Marshall 1950=1993）という地位を構成する一大要素として考えられてきたという．社会的シチズンシップ／市民性は，当時の英国社会を支える徳性や社会的責務を果たす人々にとっての，他者からみて，望ましい／敬意を持たれるような地位を指しており，社会に能動的に関わる，アソシエーション文化を創り出せるような，リスペクタビリティを体現していることと理解されていた．この社会的価値観は徐々に労働者階級にも波及・浸透し，それが一連の社会的な生活保障の枠組み（友愛組合ほかの互助組織や国家による社会保険制度）の受給要件として受け止められていったとされる．

1.2　リスペクタビリティの労働者階級への浸透

小関（2000:17-18）は，リスペクタビリティの労働者階級への浸透は，必ずしも彼らのジェントルマン理念の受容や中産階級への上昇を目指すことと同義ではなかったとされ，「労働者は労働者なりのリスペクタビリティを追求した」ともいう．しかしこの文脈でいう「労働者」とは，「素行の悪い労働者（ラフ：rough）」との区別を明確にした上で，自身の自尊心を保持することを意味した．そうした労働者が想定した「最も重要な構成要素」とは，「労働と仕事の充分な確保」を通じた「自立的な存在」を志向する態度であり，自立を支えるひとつの手段が任意団体による相互扶助へのアクセスであった．その典型的なものは，1870 年代に英国全土でかなり普及したという疾病や埋葬に備えた共済保険組合（その形態は極めて多彩であった）である．しかし加入者は特定の専門的で熟練を要する職業の労働者（鉱山や鉄道会社に多かった）に限定される傾向にあり，場合によっては禁酒主義者のみをメンバーとして認めた組合もあったという．この場合の労働者とは，その大半が男性の基幹男性労働者（熟練工）であり，農業労働者や半熟練工，危険の多い職業（鉛工，鉱夫，居酒屋主人など）に従事している場合は加入を拒まれたし，女性はそもそも加入するだけの経済的余裕もなく，こうした範疇に入ることは難しかった（Johnson 1985=1997: 43）．とはいえ，このような労働者間の境界（「リスペクタビリティ＝われわれ」か，「ラフ＝やつら」か？）は，常に流動的であったことも事実であった[3]．

1.3　世紀転換期の政治動向――リスペクタビリティを巡る自由主義と社会主義

アソシエーション文化を構成した社会的シチズンシップやリスペクタビリティという価値観は，多くの任意団体（福祉複合体を含む）を生み出したが，それは他方では，様々な政治的立場に関わる形で展開され，特定の政治的／統治様式としても認識されるものになったといえる．それは，山本（2020: 25-30）がいうような「リスペクタビリティの政治」を巡る攻防であるといいうる．この概念は，特定のリスペクタビリティ概念に基づきながら構造的に社会的マイノリティ

（≒貧困者）を再生産する運動とその脱構築をめざす運動双方に光を当てていたという．ここでいう構造とは，マイノリティの経験する社会的不平等は，社会的多数派（≒リスペクタビリティの体現者たる市民／労働者）の価値や文化を受容しそこへ同化することによって解消されるという理解である．こうした同化の政治は，貧困状態に至った者（特に成人男性）を経済的／社会的に自立させることに帰結する社会的活動へ繋がっていき，文字通り「リスペクタビリティを社会全体に浸透させようとする見地から」貧困者の生活態度，指導を条件とした慈善／懲罰を含んだ更生などを特徴とする救貧法やそれと共犯関係をもった「援助に値する／値しない」という選別主義的な社会支援（その象徴としての 1869 年に設立された慈善組織協会：COS）の枠組みを作り出してきた．この政治の貧困者へのまなざしは，「貧しい人々が貧困な状態にあるということは，それ自体，彼らが無分別であることの証明であ［る］」（cited in Johnson 1985=1997: 22）というものであり，社会階層の底辺から人が上昇する端緒は，彼らがその日暮らしの習慣を止めた時から始まる，といった典型的な自由主義的貧困観から構成されていた（ibid.）．換言すれば，リスペクタビリティとは，S・スマイルズのいう「自助 self help」概念から連想されるような，「裕福な状態が続いている人々は，人生が自らにもたらすあらゆる義務を快く受け入れる［ことであり］••• 人間としての『安全・名誉・福祉』を得るためには，この重荷［≒自助］」（cited in Johnson ibid.）を背負うという倫理感の別表現でもあった．実際に多くの民間互助組織としての共済「組合が欲していたのは［国家からの］庇護ではなく，社会的承認を得る ••• ことであり，組合員の排他性と尊敬に値する社会的地位の高さ ••• 独立心や ••• 自助努力をしたいという願望」を妨げないことをその行動規範としていたのであった（ibid.: 53）．

しかしながら，世紀転換期には次第にこうした「リスペクタビリティの政治」に対抗するような，これとは異なる思想に基づく社会的実践も登場してきたのである．この延長上にポピュラー・ソーシャルワークが位置づけられるが，ラヴァレット（Lavalette 2017: 372）は，この社会的実践の誕生する政治的・経済的・社会的背景や土壌について，3 つの重要な要素を指摘している．

第一に，一般論として英国の都市部に住む「見捨てられた人々 outcast」の生活状況に対する知的好奇心が高まった時期であることが指摘される[4]．様々な「社会問題」が明らかにされつつあり，「二つの国民（富裕階級と貧困階級）」が分断されながら同居していることを社会や国家としてどう考えるかという「問い」である．より具体的には，都市貧民の政治的・道徳的・健康的問題，「暴徒」や「犯罪」の恐怖，移民の増加と異質な政治思想［社会主義・急進主義 radicalism・フェミニズムなど］に対する懸念，英国の経済的斜陽化とドイツ／アメリカの台頭，貧困の増大が大英帝国の威信低下へ影響すること，人種問題（優生学への関心）などである．

第二に，［自由主義に代わる］労働者階級の組織と代表の可能性や，政治的変化をもたらす方法を巡る議論の活発化（いわゆる「社会主義の復活[5]」）である．当時は，社会民主連盟（1884 年），フェビアン協会（同），社会主義連盟（1885 年），独立労働党（1883 年），労働者代表委員

会（1901 年）など，労働者政党やそれを支える政治組織が勃興した時代であった．これらの「社会主義」諸派は，アイルランド自治領，ボーア戦争，女性参政権，ストライキなどでそれぞれ独自の主張と行動をとった（「上［国家や官僚的社会主義団体］からの社会主義」と「下［民衆］からの社会主義」の相克[6]）．

第三に，非熟練労働者を中心とする「新組合主義 New Unionism」の台頭である．1888 年に 10 代のマッチ工場の少女たちが起こしたストライキは，数十万の半／非熟練労働者を巻き込んだ大規模な抗議の大波を呼び覚まし，「サンディカリズム」（議会政治への働きかけよりもストによってよりよい世界を創り出すべきという考え）を招来させた．この「新組合主義」運動は，「大不況 Great Unrest（1910-1914 年）」（Ferguson and Lavalette 2007:15）をまたぐ第一次世界大戦勃発まで続く激しい階級闘争の時代を到来させたのである[7]．

こうした「下からの階級闘争／抵抗」がより顕在化してくると，自由主義陣営（その中核的価値観としてのリスペクタビリティ）を擁護しようとする階級の福祉活動主体も自己の存続を念頭に置いた動きを活発化させた．例えば COS は，自らを「ラディカルで，集団的な社会主義思想」の伝播に対する防波堤と見なしていたので，このような社会的騒乱状態へ警戒感を露わにしていたからこそ，人間的不幸をより広い経済的政治的文脈に位置づけずに，貧困者の人格的欠陥に帰しながら，「友愛訪問」を通じた個人主義に依拠した「ケースワーク」を以て貧困者を処遇しようとしたのである（Lavalette 2019: 540）．

2　ポピュラー・ソーシャルワーク研究が対象化された社会的／学術的背景

2.1　現代ソーシャルワークへの批判としてのポピュラー・ソーシャルワーク

ラヴァレット，ジョーンズ，イオキミダス（Jones and Lavalette 2013; Lavalette and Iokimidis 2011=2023）は，ポピュラー・ソーシャルワークの歴史を対象化する必要性を，彼らの専門領域たる「ソーシャルワーク」の抱える「現代的問題」から以下のように述べている．

現代資本主義社会で展開されているソーシャルワークとは，「国家が主導する形態 state-directed」，すなわち，国家に認定された専門職 profession によってほぼ独占的に提供されるものを主流として構成／認識されている[8]．従ってソーシャルワークは，国家のニーズと優先事項によって形成される活動として同定される傾向が強い．またその活動は，［英国の場合は］1970 年代までは「社会民主主義」的な前提を反映し，それ以降は「新自由主義的な neoliberal 政策基準」によって展開されている．しかし政策基準が社会民主主義的であれ，新自由主義的であれ，「国家主導のソーシャルワークが置かれている構造的条件」の最大公約数的な特徴は，救済基準の恣意的（道徳的）な運用による「給付の偶発性」という「規制と管理の実践に組み込まれた」貧困者への対処の伝統から構成されている（Jones and Lavalette 2013: 148）．

現代の国家主導による専門的なソーシャルワークの実態は，IFSW（国際ソーシャルワーカー連盟）の国際（2000）／グローバル定義（2014）とはかけ離れたものであり，実際に，現代の新

自由主義的な統制下のソーシャルワークの動きは，貧困者へのわずかな配給と監視・統制［抑圧とスティグマ化］で彩られている[9]．この意味で国家のソーシャルワークは，ますます権威主義的に振る舞い，社会福祉政策がサービス利用者にもたらす結果に発言することを怠ってきたと評価される（Jones and Lavalette 2013.: 150-151）．

しかしながら，ひとくちにソーシャルワークといってもそこには明確な定義がある訳ではない．すなわち「単一のソーシャルワークという実体概念は存在しない」（Lavalette 2019: 546）ために，ソーシャルワークが「単一の均質な専門職」［による実践］であることを示唆する明確な証拠もない（Lavalette and Iokimidis 2011=2023:181）．なぜなら歴史を振り返れば，国家主導ソーシャルワークとは大きく異なる形態（M. モースのような人類学者が示している，生活に困った人たちをケアする人間の普遍的な特性に根ざした贈与的行為）が存在しているからであり，世界には実に多様な福祉をめぐる社会的実践と考え方が確認できるからである（Jones and Lavalette 2013: 151）．それは，「何をソーシャルワークと見なすのか」という，その意味や範囲をめぐる「ヨーロッパ中心主義的な見方／英米的な見方／単一の物語」（Lavalette and Iokimidis 2011=2023: 176-177）への疑問を提起する．従ってソーシャルワークを考える上では，その言葉に「形容詞」がないと概念的な混乱を招く．なぜなら国家主導の「専門的ソーシャルワーク」が何の修飾もなく「ソーシャルワーク」を代表しようとしているからである[10]（Jones and Lavalette 2013: 151）．

ラヴァレットらは，国家主導の「専門的ソーシャルワーク」は，「政府による被害をもっともよく知っているにもかかわらず･･･［社会の中で］最も弱い立場にある人々の領域を管理・運営・配給・監督する権利を与えられた権力者の食卓に･･･ひれ伏」（ibid.: 150）していると捉えており，このような現代の「専門的ソーシャルワーク」の実体を批判するには，ポピュラー・ソーシャルワーク（民衆の社会福祉実践）の歴史的伝統に埋め込まれているものを豊かに描き出すことが必要だという[11]．むしろ IFSW の定義に即しているのは，ポピュラー・ソーシャルワーク実践であるというのが彼らの主張である．それにもかかわらず，その歴史的遺産は，専門職養成機関としてのソーシャルワーク高等教育（大学）のカリキュラムで提供される主流の「ソーシャルワークの歴史 the history of social work」（研究）からはほとんど捨象されている（ibid.: 151）．

この意味で［もっぱら COS とセツルメントに代表されるかのように描かれる傾向の強い］「主流のソーシャルワーク」の歴史観／記述[12] historiography を相対化することは，ソーシャルワークが実際のところは過去も現在も多様な形態を持つがゆえに，多層的に構成されうるものであることを意味する．また「専門的ソーシャルワーク」がソーシャルワーク領域の独占や植民地主義によって民衆主体のポピュラー・ソーシャルワークを疎外，無視，悪者扱いしているため，ますますポピュラー・ソーシャルワークの歴史／実践研究の掘り起こしが喫緊の課題であるとしている[13 14]（Lavalette 2019: 538）．

2.2 「専門的ソーシャルワーク」の含意している歴史観／記述 historiography

このことに関連して，ファーガスンら（Ferguson et al., 2018: 156-7）は，主流の「専門的ソーシャルワーク史」が依拠している歴史観／記述の含意内容を 4 点にわたって批判的に論じている．

第一に，「専門的ソーシャルワーク」の歴史の主流的形態の多くは，「先駆者 pioneer」として知られる慈善家[15] の才能を中心に単調に構成されていると指摘できることである．それは，貧困者や機能不全家族らを窮地から救済するための専門知 expertise［ケースワーク］を身につけることに専心し，心優しい善良な人々としての教訓的で陳腐な決まり文句に覆われた歴史観／記述によって描写されていることを意味する．

第二に，しかしながら，これらの歴史は，ソーシャルワークが［資本・国家・民衆間の階級的な力関係に基づく］政治的打算の産物であり，専門職の創造的な過程が［歴史に登場する社会福祉をめぐる agency や actor 間の］政治的対立によって矛盾や葛藤に満ちることで拘束されていたという事実にはほとんど触れていない．それだけでなく，そうした実践を取り巻くより広い政治的文脈や，先駆者の持つ階級性，［その影響による］専門職の内部矛盾（イデオロギー）へ言及することはほとんどない．

第三に，こうした主流の歴史観／記述は，世界の諸地域で発達し，社会変革 social change をもたらす可能性のある社会的同盟を支持するようなラディカルなソーシャルワーク［≒ポピュラー・ソーシャルワーク］の形態を歴史から消し去っている．そこでは「専門職」の源流として同定されてきた団体や政治組織の専門職による実践に対するトップダウン型アプローチ[16]を拒否することが常態化しているにもかかわらず，である．

第四に，このような「選択的健忘症 selective amnesia」［という意識的に忘れられたことにされている事態］の帰結がソーシャルワークの歴史や現代的形態をめぐる「社会的現実から切り離された，歪んだ，非現実的で無力化する自己空想の創造」の産物であること．歴史的にいってこの自己認識の欠如が，世界でソーシャルワークを疑わしい活動にしてきた側面[17]を生み出してきたともいう．

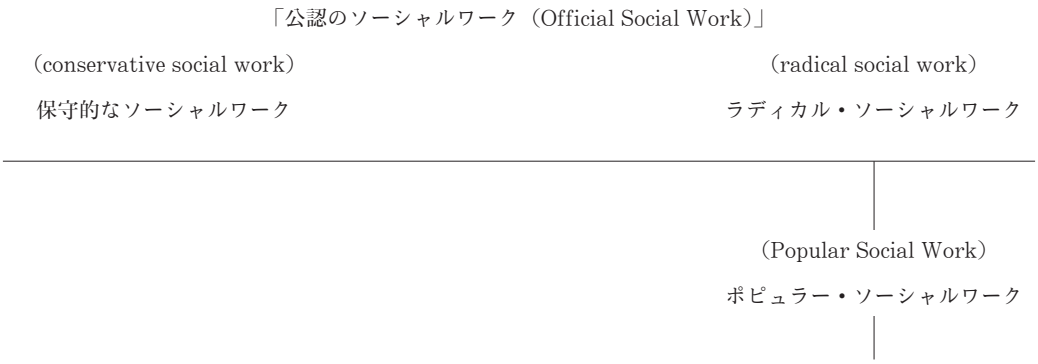
2.3 ポピュラー・ソーシャルワークの意味と特色
——実践の前提としての「自助」概念

ポピュラー・ソーシャルワークの 3 つの意味

ラヴァレットは，ポピュラー・ソーシャルワークという言葉を 3 つの意味で使用している（Lavalette 2019: 538-9）．

まず，この場合の「ポピュラー・ソーシャルワーク」とは，国家主導の社会福祉サービスよりも，サービス利用者に好まれ，支持されていることがある（スティグマがない）．次に図 1 が示すように，（法規制・資格化・国家の承認に基づく，オーソライズされた）「公認のソーシャル

ワーク（official social work）」は，左側にある「病理学的で統制的なソーシャルワーク（保守的なソーシャルワーク conservative social work）」から右側にある「ラディカルなソーシャルワーク radical social work」のスペクトラムがあり，大多数のソーシャルワーカーはこの間を往還している（Banks 2012=2016:201-202 も参照）のだが，「公認のソーシャルワーク」から「ポピュラー・ソーシャルワーク」へと続く垂直面もあり，「この 2 本の線がいつ，どのように交差するのかが興味深いポイント」になる．その理由は，ソーシャルワーク実践に関与する哲学は，医学的な障害モデルから社会モデルまで幅広い振幅のなかで展開されているからである．前者は，利用者／クライエントの行動を病理的に理解するに比して，後者は不正義や抑圧という視点から理解しているため，ソーシャルワークの課題と方向性は自明ではなく，実質的にこの社会的実践をめぐる「相反する視点とその政治性について考え」させるという問題を提起しているからである．最後に，この場合の「ポピュラー」とは，「民衆階級 popular class」と呼ばれる人々による，貧困・抑圧・差別などに対する［社会］正義を求める抗議運動，意識的で政治的なソーシャルワークと密接に関係を持つことを含意している．



▲図 1　ソーシャルワークへの対照的なアプローチの類型
（Lavalette 2019: 538）

ポピュラー・ソーシャルワークを理解する上での「自助」概念

ジョーンズとノヴァク（Jones and Novak 2000: 34-51）は，19 世紀から現在に至る「民衆福祉 popular welfare[18]」の多様な歴史的形態を紹介しながら，その内実の特徴を論じている．「民衆福祉」は，国家や市場を通じて提供されるものでもない，人間のニーズを広く受け容れる広大なネットワークの中で形成されてきたという．それは現在においても継承されており，民衆の「集団的で民主的な活動の最も重要な分野のひとつ」である（ibid.: 38-39）．

「民衆福祉」の歴史を検討する理由は，「何世紀にもわたって人々を平等に扱い，寛容と尊敬の念をもって社会正義に基づいた，よりよい社会のビジョン［としての戦後福祉国家］が経済的，社会的，政治的な変革のために闘う何百万もの人々」にとって，その「ニーズや要求を満たすにはほど遠い」存在であったことにあり，その対応が貧困者や有色人種にとっては抑圧を強化した

ため，「資本主義社会の原理と優先順位に異議申し立てをし，私利私欲でなくヒューマン・ニーズの原則に基づく社会を作ること」に失敗したからである（ibid: 34）．実際の国家福祉 state welfare は必要なものをある程度は提供してくれるかも知れないが，大多数の人びとにとっては疎外と抑圧を経験する場である．利用者がその内実に異議申し立てをして影響力を発揮できることはほとんどない（ibid.: 50）．

彼らによれば，福祉とは，第一に，歴史的にも「国家福祉」と「民衆福祉」との間で発生する社会的闘争を言い換えたものであり，それはしばしば対立する福祉提供のパターンを示してきた．第二に，後者を考える場合のポイントは，**民衆に内在化された独自の自助観念とそこから創発された福祉の意義を捉える必要性**である．そうした歴史を掘り起こしその内実を追求するには，「世界がどのように変わるか，福祉がどのように組織され，どのような意味を持つかというビジョン」としての予示的な形態を対象化しなければならないという．なぜなら「福祉は常に階級闘争の核心」であったからである．彼らのいう「民衆福祉」は，「社会変革のための闘争」を直接的に意味しており，それは，政治経済という抽象概念から構成されるというよりも，歴史的に確認できる「人間の福祉 human welfare への関心」に基づいていたのである（ibid.: 34）．

「民衆福祉」を理解する上での核心的な概念こそが「自助 self help」である（ibid.: 36-37）．「自助」という言葉は特に 19 世紀以降に政治的右派［≒資本主義を推進する階級と国家］が乗っ取り，利己主義や社会的支援制度の欠陥を正当化するようなビジョンに利用され，それが歴史上ことあるごとに国家福祉の制限や解体への正当化の手段として使われてきたとされる．（複合史研究が示唆するように）一般的に，労働者階級にとっての自助（概念や形態）は，資本主義的イデオロギーを労働貴族が内面化していった歴史的過程として描かれがちである．それは「自助」概念を資本主義のエートスと同義と見なすことを意味するが，自助を「単純にブルジョア的な考えや価値観の反映として片付けるにはあまりにも複雑」な概念であることに注意しなければならない[19]．つまり，この当時の労働者階級（≒民衆）の「自助」を詳細に検討すると，ブルジョア的な要素と闘いつつ，それとは関係を持ちながらも独立したという意味での「労働者階級の文化と闘争に根ざした」エートスや形態が確認でき，それは政治的右派がいうような「単一の活動やプロセス」を必ずしも意味していない．「民衆福祉」の核心たる「自助」は，ブルジョア的な自助イデオロギーを受容しながらもそれに染まりきらずに，民衆独自の生活文化に根ざした生態的な居場所としての意義を確保することから，ブルジョア的自助が蔓延するかのような「現状を打破する手段として労働者階級を断固として独立させること」の基盤になることまで非常に幅広い政治的／経済的／文化的スペクトラムの中で展開されていたのである．例えば，友愛組合や協同組合の組織率は，当時の「労働組合の三倍」に到達している．それらは単純にブルジョア的イデオロギー（自助／リスペクタビリティ）を受容した労働者階級による組織ではなく，「労働者階級のラディカリズムの源泉や競争的個人主義 ･･･［を批判する］相互扶助の利点の象徴として」も重要な存在であったという．当時の民衆階級とは，［この意味で多様であり］政治的右派がいう「自助イデオロギー」を受容／内面化した労働者階級とは，「まったく異なる活動形態と政治

意識」に根ざしていたことが含意されなければならない．従って，

「このような自助の歴史やその現代的な表現を無視したり，［政治的右派のように］自助の定義を独占する権利を主張して［労働者階級の独自の文化に基づく］自助［の考えや形態］を否定することは，かつて労働者階級の組織や闘争の中心的な原則であり，被抑圧者の闘争を特徴づけるものを放棄することになる」（ibid.: 37）

要するに，ジョーンズとノヴァクは，「自助」という言葉は，ブルジョア＝自由主義国家やそれを支持する階級やそのイデオロギーを受容／内面化した者たちが使うものと，それとは対照的に，資本主義社会に翻弄されつつもそれに対抗するような民衆がその生活文化のなかで独自に培ってきた考えに基づく形態がそれぞれ同定できると主張しているのである．後者の自助とは，この意味で民衆の支持に依存しており，その定義からして自発的で［外部（資本と国家）から］強制されたものではない（ibid.: 39）．

「［民衆福祉は］自助グループ，協同組合，クラブ，協会，組織，団体などフォーマル／インフォーマルを問わず，多種多様な活動を包含している．なによりも［民衆たちは，資本主義から強制された防貧という意味での］金銭的動機から義務的に参加しているのではなく，［過去から現在においても］自ら選んで参加している［のである］」（ibid.）

ジョーンズとノヴァクは，国家福祉（の歴史）は，民衆が自分のニーズを満たすサービスの計画に関与することに関心がないほど愚かであるという馬鹿げた仮定に基づいていると指摘する．しかし民衆福祉は，彼らが「相互に利益を得るために自由で自立的な自己組織化」に基づいて「集団的，独立的，自律的な活動」を展開していることに特徴があり，それは「従来の意味での『労働者階級』に限らず ••• 貧困層，女性，黒人，障害者などの闘争」の中にも見いだされる．「民衆福祉」は彼らの「集合的な経験」に依拠した「自分のニーズを定義することを可能にする」ような「生活や文化を反映した方法」を創出することで国家福祉の不充分さに対する「代替モデルや実践を構築しようとする試み」を形成している．これは民衆が「連帯感，民主主義，相互尊重の価値を支え，促進する」性質を持つことを示している（ibid: 39-40）．より具体的には，専門家のジャーゴンに異議申し立てをすることで，福祉へのアクセスと意志決定［過程］を民主化し，関係者のスキルと知識を共有しながら専門家の専制を克服するような闘いを生み出してきたのである．民衆福祉の諸実践は，「無学で価値がないと見なされてきた人びとが機会を与えられれば複雑な組織運営の中心として働き，［国家福祉を通じて］組織的に否定され妨害されてきた彼らの能力，知性，感性」を発揮できることを証明している．これらは，個人化の促進や，受給者にスティグマを与えその尊厳を貶める国家福祉の形態とは対照的であり，そうした歴史的事例からは，「何の役にも立たないと思われがちな人々の創意工夫，つまり資源をかき集める能力，

即興性，想像力が際立った例が枚挙に暇がない」ほど見いだされる．国家福祉と民衆福祉の間にある違いとは，まさにこの「同じ言葉［自助］を使っていても両者は全く意味が異なる」ことなのである（ibid.: 41-43）．

こうした民衆の自助概念を批判する者たちは，それをブルジョア的な自助概念と混同しているだけでなく，民衆階級のいう自助概念を反動的・陽動的あるいは打倒すべき体制（自由主義）に対する限定的な防衛策であると見なしているが，これは［民衆の自助を批判する者が］政治闘争とはなにかを誤解することから生じている．自助は，個人やコミュニティが自分自身を守り，充たされないニーズを充たそうとする場合に生じる防衛的な性格を有しているが，それは誰がそのニーズに対して責任を持つのかという文脈の中で行われるのであるから，［民衆にとっての］自助は，［ブルジョア・イデオロギーに依拠した国家福祉に規制された］現状（status-quo）への批判や異議申し立てをし，代替的な説明やビジョンを打ち立てたりするという意味で，現状の変革のための基盤を創造したり，維持したりする性質を持つのである（ibid.: 44-45）．

ここでのポイントは，「普通の人びとが自分たちの生活を運営する能力を信じている」（ibid.: 43）ことこそが「民衆福祉」の基盤であると認識されていることである．つまり自助とはそのような意味で使われているのである．

3　考察と展望

ラヴァレット，ファーガスン，ジョーンズ，ノヴァク，イオキミダスの問題意識は，現在のソーシャルワークの実在性と言説をめぐる諸課題を考察するにあたって，ポピュラー・ソーシャルワークの事例を「社会福祉／ソーシャルワーク（の歴史）」のなかに再び浮上させ，そこで培われた思想や実践方法の系譜を適切に位置づけ／評価し直す必要があるというものであった．この意味でいえば，彼らのスタンスは，かつての伝統的な社会福祉史研究が「国家福祉（とその中で発達したソーシャルワーク専門職制度）に収斂するかのような描かれ方」をしてきたことへの複合史研究による批判（伊藤 2022）と同一線上にあると評価できる．

しかしながら本質的に問われなければならないことは，次の 2 点である．ひとつは，その批判の方向性（どのような「社会福祉の歴史」を掘り起こすことが「国家福祉（と専門職）へ収斂するかのようなこれまでの社会福祉史像を相対化するのか？）がいかなるものであるのか．もうひとつは，その歴史に登場するエージェンシーやアクターの指示対象がより具体的に誰／何であるのか，そこにどのようなことが含意されているのか，そのことが社会福祉史の表象の内実とどのような関係があるのかということである．

本章では，ポピュラー・ソーシャルワークの歴史を振り返りつつ，それが何を意味するのかを改めてスケッチし，併せて今後さらに追究されるべき諸課題について若干の考察をしておきたい．

3.1　もうひとつの社会と社会福祉／ソーシャルワーク

まず複合史研究の成果から次のことが確認できる．世紀転換期以降の英国社会では，社会的シチズンシップの構成要素たるリスペクタビリティという社会的価値観が次第に醸成／強調され，それが「アソシエーション文化」を通じて労働者階級にも浸透し，様々な「福祉複合体／福祉ボランタリズム」の多様な形態を生み出してきた．しかしながら，こうしたアソシエーションが興隆するなかで，その方向性に批判的な社会的実践も歴史に登場したことになる．そのひとつがポピュラー・ソーシャルワークであった．それは複合史研究のいう，リスペクタビリティを体現しようとした人々とは異なる独自の思想／イデオロギー，すなわち，社会主義，フェミニズム（女性参政権拡張），反帝国主義といった，当時のエスタブリッシュメントたる国家や市民社会の思想的基盤である自由主義（Liberalism）や新自由主義（New Liberalism）と親和的な社会改良（社会福祉）の在り方とは一線を画した，独自の民衆文化を基盤にした担い手によって追求されて来た形跡を持っている．その特徴は，「市民社会」の容認する社会福祉（サービス供給の在り方や利用者に要請される前提条件）とは異なる，民衆自身がそのニーズを自己定義することに基づくものであり，「市民社会」が容認する福祉を**与えてもらう**のではなく，自らがそれとは異なる原理や考え方（仲間意識 comradeship）に基づく社会福祉を**獲得しよう**と追求したという意味での，「もうひとつの社会と社会福祉／ソーシャルワーク」を生み出そうとする姿勢に依拠した社会的実践と評価できるものである[20]．ジョーンズとラヴァレット（Jones and Lavalette 2013: 155）が言うように，「彼ら［＝民衆］が人生の最悪の事態から自分たちを守ろうとして制度や組織を作る際には，常にニーズが重視されていたが，同時に，そのような取り組みを自分たちでコントロールすることが重要であることも強く意識」されていた．当時の民衆階級の多くは，資本主義国家は資本家以外に利益をもたらすような社会改革を容認することができず，資本家のみに利益をもたらす現状を変えようとする［反自由主義者たちのあらゆる］試みには限りなく抵抗する」と考えていたからである．

こうした従属階級としての労働者の自主的・自律的活動（民衆福祉）の存在は，常に権力者にとって最大の政治的挑戦を意味した．だからこそ「国家福祉（特に公教育）」がこれを換骨奪胎するために大きな役割を果たしたのである[21]．言い換えれば，「国家福祉」の成長とその承認に基づく「専門的ソーシャルワーク（の歴史）」は，「民衆福祉（の歴史）」の持つ潜勢力を縮減化することによって成り立ち，その立場を強固にしてきた側面が認められるのである．

3.2　ポピュラー・ソーシャルワーク（研究）は，どのような歴史観・記述 historiography を提供したか？

この実践形態の歴史的事例をやや詳細に見ていくと，いくつかの特徴が見えてくる．それらは，貧困や問題を抱えた人々を［リスペクタビリティという社会的価値観や規準を持ち出して対象化する／しないという意味での］「取り締まり（policing）」の対象とは捉えていないことであ

る[22]．言い換えると，クライエント／利用者集団が先験的に病的で劣っているという見方に与していないのである．また，多くの問題の根源である貧困の物質的背景を粗末に扱わない／無視していないことにある．さらに，もっとも重要なことは，「自分たちがいかなる意味においても権力者／富裕層と比較して劣っていない」という意味での意志を鮮明にしていたことである（Jones and Lavalette 2013: 152）．

特に最後の点は次のことを意味している．すなわち，「アソシエーション文化」の中で培われた「福祉複合体」の自由主義的性格は，ポピュラー・ソーシャルワークの担い手からすれば，労働者階級の多くを劣った存在として道徳的に非難し，自分たちの資本主義的な欲望や特権に忠実な人間を養成／要請しようとする「ブルジョア的な傲慢さ」（Jones and Lavalette 2013: 160）を反映した性格を色濃く持っていたのである．なぜなら国家と「福祉複合体」による「官民連携」の含意内容とは，労働者階級「から潜在的な『労働者階級性』を除去するため，彼らを援助し，彼らの経済的宿命［≒貧困］をよりよいものにするのは，その後のことである」という中産・上流階級の政治的利害を前提にしていたからである．彼らは民衆の資産が増えると動物的な放縦を招くと本気で信じていたのである（Johnson 1985=1997: 186）．これら中産階級の観察者たる

「［自由主義を信奉していた］個人主義者たちは，けっして労働者階級の不安定な経済環境について適切な配慮をしたことはなく，したがって実に詳細な善意から出た調査が行われたにもかかわらず，**貧民街の生活を貧民街の視角でとらえることはできなかった**．個人主義の立場に立つ著述家のペンによって生み出された，ほとんどあらゆる著作が，このことを示している．••• 実際のところは労働者がいくら節倹を心がけても失業から身を守る術を持たないという『貧困の循環』という事実をこうした著述家はきちんと捉えられなかったのである」（ibid.: 188-189 傍点太字引用者）

多くの共済組合は労働者を加入させるに際して，政治的中立性を意識的に主張するという没イデオロギー的な受け入れ姿勢を示しながらも，実際には加入者の意識を政治や大陸の社会主義ないし無政府主義に向けさせないためのイデオロギー的な装置としても機能していたのである（ibid.: 51）．

とはいえ，こうした労働者の持つ階級性／階級意識を飼い慣らそうとする試みは，ロイド・ジョージの自由党社会改良政策，COS やそれに親和的な福祉供給主体の運営者ばかりでなく，「社会主義」を標榜する中産階級出身の知識人であったウェッブ夫妻（同夫妻は，社会主義者であったが同時に帝国主義者でもあった（大沢 1986: ch.4）ことに注意）やセツルメント運動の先駆者たるキャノン・バーネットたちのエリート主義的な言明や行為の内実にも見いだされる[23]．アラン・ジョンソン（Johnson 2000: 102-104）が的確に指摘しているように，彼らは自らを社会改革者の英雄と見なしていたので，彼らから見て恐怖と哀れみの入り混じった対象である労働

者階級を自由主義者とは異なる形で自らの構想する社会民主的な枠組みの中に取り込もうとしたのである．それは彼らなりの良心の発露でもあったかも知れないが，潜在的に彼らの持つ「民衆的な運動に対するエリート主義からの恐怖」の裏返しでもあった[24]．特に「ポプラーの反乱」（Lavalette, 2006, 伊藤 2017）を指揮したジョージ・ランズベリは，COS はもちろんのこと，セツルメントやフェビアン協会の貧困者に対する態度を「貧しい人々の家を覗き見したり，詮索したりする」ものとして捉えていたので軽蔑の対象にしていたのである．

以上を要約して誤解を恐れずにいえば，この世紀転換期は，一方でアソシエーション文化とリスペクタビリティの価値観を隆盛させ，その精神を受容・内面化する労働者とそれを支える民間福祉組織を多数生み出した時代であったが，他方ではそれに包含されない労働者の貧困・生活問題も大きく顕在化し，そうした労働者（熟練／非熟練）を（主に）自由主義陣営と社会主義陣営が取り込もうとした政治が展開された時代でもあったといえよう．換言すれば，リスペクタビリティという社会的価値観（言説）は，「『意味をめぐる闘争の場』であり，相対立する［政治的］勢力が自らの階級的利益をそこへ埋め込もうと」（Garett 2018: 15）していたのである．

ポピュラー・ソーシャルワーク実践の歴史からは，この時期に拡大した国家主導の福祉形態に対する（下層）労働者／従属階級からの「批判的な叫び」という側面が見えてくる．確かに，この実践は直接民主主義的な「草の根レベル」「下から」のそれによって追求されていたし，実践の主要アクター／エージェンシーたちは，彼らから見た国家福祉の意義ある再編を視野に入れていたことは事実である．例えばシルビア・パンクハーストは，貧しいイースト・エンドの労働者家族を支援するために様々な社会的実践にコミットしたが，それがひとつの対症療法ないし一時的な緩和策であることは充分に認識していたからこそ，貧困を放置したり，女性参政権を認めない当該社会全体の「システムを変えたい」（cited in Lavalette 2017: 369）と明言してはいた．しかし，だからといって，ポピュラー・ソーシャルワークを追求した当事者たちは，当時の自由主義国家の進める福祉政策や制度の内実と自己の社会的実践を同一視していた訳ではなかった．彼らの求めていた社会福祉制度は自由党社会改良政策の水準でなかっただけではなく，フェビアン主義の主張する「社会主義的な」方向性でもなかったのである（伊藤 2000b; 2017）．

ポピュラー・ソーシャルワークの担い手たちが中産階級のエリート的な振る舞いをはっきりと嫌悪していたことに鑑みれば，ポピュラー・ソーシャルワークが，端的に反自由主義的／反帝国主義的という政治的な要素を内面化した労働者たちが育んだ独自の自助概念から生まれた文化的相互扶助ネットワークの別表現であることの意義が見えてくる．ポピュラー・ソーシャルワークを支えた民衆階級のエートスは，「本能的な反国家主義と反権威主義」から構成されており，彼らの持つ「下からの戦闘的な社会主義の潜在的な力」（Johnson 2000: 102-103）を基盤としていた．そのような民衆階級が培った独自の自助概念に基づく階級的政治の様式が，彼らにとっての尊厳の源泉であったのである．従って，ポピュラー・ソーシャルワークの歴史は，総じて反自由主義的／反ウェッブ史観的な様相を示しており，複合史研究が主張する意味での国家福祉に収斂するかのような単線的な進歩史観に基づく社会福祉史像を相対化するものである．

3.3 「民衆」とは誰なのか？

本稿は，世紀転換期の福祉を担う主体や方法の種類や性格の違いを複合史研究のいう「福祉複合体」とポピュラー・ソーシャルワークを比較対照する形で考察している．本稿の課題からいえば，同じ歴史の舞台に多くのエージェンシーやアクターが登場するものの，その集合名詞ないし人称代名詞に含意されている内実をどう理解するのかが極めて重要になる．最後に，この「民衆とは誰なのか？」をめぐる課題を若干取り上げておきたい．

本稿の 1.3 で触れたように，「世紀転換期イギリスの人びと」（小関編 2000）と名指しされた人称代名詞としての労働者によるリスペクタビリティの受容は，それ以外の「素行の悪い労働者 rough」とのアイデンティティをめぐる境界線問題を惹起したが，両者の関係は常に流動的であったことも確認してきた．実際のところ，労働者が自身をめぐる「リスペクタビリティか，ラフか？」というアイデンティティ上の境界線をどう同定したのかを歴史学的に確認することは，小関（2000: 13）や山本（2020: 36-45）が示唆しているように，極めて複雑さを伴う困難な作業である．

まず英語の popular をその訳語を含めてどのような考察対象に据えるのかが極めて難問であることを指摘できる．当然のことながら，「人民 people」「大衆 mass」「公衆 public」「群衆 crowd」「市民 citizen」「暴徒 mob/rioter」などの諸概念の区分の系譜を，その指示代名詞が出現した時代文脈に即して学術的な追究を精緻に行う必要性があることは言うまでもない．歴史に登場するアクターやエージェンシーとしての「人びと」は，彼（女）らが時代のなかで何を感じ・考え，どのように行動／行為をし，その痕跡に何を残したのかによって，同時代の他者からも後代の人びとからも，名指しされる名称（どのような人びとであったか？）が異なるし，その含意内容も変化するからである．

しかしこの問題は，実は旧くて新しい課題であることを踏まえなければならない．「民衆階級の持つ主体性」に関する歴史研究の蓄積は，長い歴史を持っているからである[25]．

民衆史研究の先駆者としての E.P. トムスン

英国の歴史学（労働史／社会史研究）において労働者階級の主体性を正面から論じた一連の労作は，いわゆる「ニューレフト史学」（長谷川 2016）と形容されているが，その筆頭に挙げられ現在においても必ず参照されるのは，言うまでもなく，E.P. トムスンの大著『英国労働者階級の形成 The Making of the English Working Class』（初版 1963 年，以下『形成』）である（Thompson 1980=2003）．この著作でトムスンは，それまで歴史学の対象として真正面から取り上げられることの少なかった，労働や生活をめぐる労働者階級独自の社会的実践の内実を明らかにしてきた．トムスンは，資本制の専制（搾取）が過度に強化されたと彼自身が理解した 1780 年頃から 1830 年頃を対象にして，当時の民衆階級が培ってきたエートスから生じた職人的／プロレタリア的な主体性を発揮したと評価しうる様々な抵抗形態の様相を描いたマルクス主義史家である．トムスンは労働民衆 working people が，それまでの経済学や社会学では常に受動的な

対象（前者からは，統計データの一つとして，後者からはエリート官僚の構想する社会計画の単なる客体物）として描かれていたことに疑問を呈し，民衆階級が歴史における能動的な行為主体 agency であることを真正面から論じ，彼らの存在を歴史学的な対象として復権させることからマルクス主義史学の可能性を拡張した．それは同時に，学術的には 1950 年代から強固に影響力を持った「スターリン主義」的なマルクス主義理解へ反論することをも意味していた[26].

「労働者階級の形成は経済史上の事実であると同時に，政治史や文化史上の事実である．それは，工場制度から自然発生的に生み出されたものではなかった．またわれわれは，『産業革命』という外的な力が，人間性というなんの特徴ももたない画一的な原材料にはたらきかけて，それを最後に『新しい種族の人間』に転換したと考えるべきでもない．産業革命期の変化しつつある生産関係と労働諸条件は，原材料にあるのではなく，自由の身に生まれたイングランド人に ••• 押し付けられたのである．••• 労働者階級は，それがつくられたものであるというに劣らず，自らを形成したのである」（Thompson, ibid.: 227-228）

後にトムスンの『形成』を，女性労働者の表象方法が極めて恣意的（男性労働者の付属物的な扱い）であるという理由から批判するジェンダー史家であるジョーン・スコット（Scott 1988／2018=2022: 160）は，次のようにいう．

「『形成』は，『［下部構造が上部構造を一面的に規定することを反映したものであるという経済決定論としての唯物史観を受容する］経済学者流のマルクス主義の表記法』に反対し，工場労働者は不可避的に転向してプロレタリア階級のアイデンティティを抱くようになる，そしてその条件は政治的な正しさにかんしてあらかじめ存在する何らかの規準によってはかることができるといった，階級意識の発達についての考え方とは違う考え方を示すために書かれた．トムスンにとって，人間主体は歴史の変革における能動的行為者であった」

トムスンが『形成』で行ったことは，レーニン的な前衛主義への批判であった．仮に知識人が存在しなくても彼のいう労働者階級（民衆）は圧政（資本主義的搾取）に対する抵抗や蜂起を行える革命的な集合的意志と行動力を発揮しうる直接民主主義的な「ちから」があることを歴史学的に証明しようとしたことにあった（Scott, ibid.）.

スコットよりもより積極的にトムスンの「全歴史学的構想」を高く評価するエレン・ウッド（Wood 1995=1999: 101-103）は，『形成』に一貫して流れる主題とは，民衆が資本主義的諸関係の論理（搾取と抑圧）に抵抗するにつれて，民衆文化の途切れることのない伝統が，いかにして労働者階級の文化に変わっていったのか，言い方を変えれば，「資本主義的な生産関係」たる「下部構造」が「上部構造」のなかでも機能していることを示すために，歴史における「連続性の内における変化の論理」を論証するものである，とする．ウッドは，トムスンの卓抜とした力

とは，歴史学研究における「連続性と変化［断絶］との込みいった相互作用をたどる」類い希なる「［歴史的］過程に対する深い認識力」にあるとする．また階級闘争が生じる「生産関係の論理を一つの抽象として」扱うのではなく,「人びとが生きる毎日の社会生活における処理の内実」,すなわち「生産それ自体の領域外の具体的な制度や実践のなかに現れる，活動する歴史原則として明らかにする能力」であると分析している．

こうしたトムスンの歴史学的構想力から浮かび上がった「階級」概念とは，大方の社会学者が捉えているような「構造的な場所」として同定しえるような，社会階層的な一形体たる「所得」や「職業」などの「経済的基準に応じて分化した，ヒエラルヒー的構造内の一つの層として」捉えるのではなく,「歴史的な過程」(「構造化された過程」）や関係として捉えられるものなのである（Wood ibid: 113; 117）．トムスン（Thompson 1980=2003: 14）はいう．

「階級が社会的・文化的に構成されるものであると考えないならば，われわれは階級を理解することはできない．そして階級は，かなりの歴史的期間にわたって自ら展開していくものとしてだけ研究しうるような諸過程から生成する ••• 階級は自分自身の歴史を生きる人びとによって定義されるのであり，結局のところ，これがその唯一の定義なのである」

トムスン以後

このトムスンの労働民衆の主体性に焦点を当てた歴史研究は，労働史／社会史研究の金字塔のひとつとして評価され大きな影響力を持ったが，やがて大きな批判に晒されることになる．それらは，①ルイ・アルチュセールが定式化した「構造的マルクス主義」とそれを支持するペリー・アンダーソンとの「マルクス主義内」での論争（Anderson 1980），②歴史学における「言語論的転回」「文化的転回」の影響を受けた「ポスト構造主義」による諸研究からのマルクス主義史観への批判（伊藤 2022: 26-27; 長谷川 2016），③それに関連して 1970 年代に興隆する「新しい社会運動 New Social Movement」の出現とその研究（Lavalette and Mooney 2000: 7-9）の登場などからである．

特に②と③は，次のような研究動向と関わっている．ひとつは，（本稿注 7 で示したように）「労働者階級」はトムスンのいうような一枚岩の階級意識から構成される存在ではなく，様々な利害が錯綜した「人びと」から構成されていたという，マックウィリアムなどによる民衆の「政治文化」研究である（McWilliam 1998=2004）．マックウイリアムの研究は，労働者階級の持つ「主体性」とは，トムスンが言うような反資本主義的な動きばかりではなく，ロイヤル・ファミリーを敬愛する行為や歴史的文脈に応じて社会改良的な運動に合流したり，しなかったりといった，革新的かつ保守的なメンタリティの同居状況に焦点を当てているものである．こうした研究からトムスンらの労働史研究は階級概念を主軸に社会主義が復活したと捉えているという意味で「旧説」と位置づけられたが，その相対化を促進する議論が生まれてきたことがある（伊藤 2022: 25）．

もうひとつは，前者の議論に関連して「階級」カテゴリーに属さないと理解されたアイデンティティたる「ジェンダー」「障害」「人種」を主軸とする主体の持つ複合的な関係を歴史研究の中において問い直す動きである（スコットの研究はここに位置付けられる）．またこうしたアイデンティティを持つ人々の行う，社会福祉を含めた現在の社会的実践の持つ意味のあり方／表象のされ方の探求である[27]．

民衆福祉とその表象をめぐって

過去においても現在においても「民衆とは誰なのか？」を改めて考察するには，何から着手すればよいのだろうか．そのヒントを得るために中谷（2013: 16-18）の研究を一瞥してみよう．中谷は 1930-1950 年代の日本に登場した「民衆」「大衆」「人民」と指示された人びとの存在を巡る文学評論に依拠した表象研究において，日本民衆史研究の第一人者であった安丸良夫と色川大吉の言明をとりあげている．安丸は 1990 年代末の雑誌対談において，「民衆」という言葉は大正デモクラシーを契機として構築されてきたものであり，［レーニン的な意味での］リーダーシップ［が存在したのか］は不明確だが，政治的な能動性を表現した存在として登場したと述べている．安丸は 1970 年代にすでに「民衆とは，自己と世界の全体性[28]を独自に意味づける権能を拒まれている人たち」と定義していた．中谷は安丸の見解には，「『民衆』という語には＜支配 - 被支配＞の関係が刻まれている」ことが含意されていたとする．他方で中谷は色川の「民衆」の定義も紐解いている．色川は，「民衆」を考えるにあたっては，先の安丸［や E.P. トムスン（安丸はトムスンの研究を参照している）］のような＜支配 - 被支配＞から脱する政治的な能動性を発揮する方法（≒階級闘争）という二項対立的な捉え方だけでは不充分であると主張する．なぜならそうした「民衆」にも当然階層性（これは中谷が追求しようとした民衆間にある階級／ジェンダー／アイデンティティの諸相を意味するだろう）や転向・裏切りがあり，それは経済的利害を共通にしたある一枚岩の社会集団や被支配階級に一括できる単純な存在ではないからである（マックウイリアムの見解は色川のそれに近いかもしれない）．中谷はこれを受けて，「民衆」は「人民」ほどの政治性は濃くないが，「大衆」よりかは政治的能動性がある存在（概念）であるようにも思えるものの，だからとって両者は必ずしも政治性の濃淡で概念的な区分をされてきたものでもないと述べている[29]．

このことを踏まえた上で，世紀転換期英国の「労働者」をめぐる階級とアイデンティティの関係を理解するために，アンソニー・ギデンズ（Giddens 1984=2015: 235-242）のいう「アソシエーション／組織／運動」の概念的区分を挿入してみよう．というのも，複合史研究のいうアソシエーションとしての福祉供給体を利用した（リスペクタビリティを受容した）労働者と，それに包含されずにそれとは異なる社会を作ろうと政治運動の文脈で展開されたポピュラー・ソーシャルワークによる社会福祉実践に参加した労働者との間では，明確に福祉に寄せている「目的や意義」が異なっているようにみえるからである．もちろん，ここでの両者の区分は歴史学的というよりも社会学的ではあるし，どちらも彼らなりの「主体性」は持っていたと言えるが，敢え

て両者を区分しているものは何かを探ってみよう．

ギデンズの社会理論を研究している宮本（1998：98-99）は，両者の関係を次のように要約する．アソシエーションの概念とは，すでに伝統化され規則化された知識の適用によって社会的再生産の条件を維持するために集団に与えられた名称であり，これに対して組織や運動は，システムの再生産条件を再帰的に調整するために生じる集合体である．前者は，社会に主だった問題を見いだすことはしないで伝統に定められた定型的な行為や活動を実践し，後者は社会に問題を見いだしてそれを変革するために活動する．この定義からすれば，複合史研究の示すアソシエーションたる福祉供給体を利用した労働者たちは，社会に積極的に変革を要求するような問題を見出せていなかったことが示唆されるだろう．逆にポピュラー・ソーシャルワークの社会福祉実践に参加した労働者たちは，社会を変革する必要性を見出していたことになるだろう．

ここから次のことがいえそうである．リスペクタビリティを受容した能動的市民に近づこうとした労働者からすれば，現行自由社会には大きな問題があるとは認識していなかったのだから，反自由主義なり反帝国主義的な立場を強固に保持していたと思われるポピュラー・ソーシャルワークたる「民衆福祉」は，「素行の悪い労働者」から構成されていた，ということだ．これは階級というアイデンティティをめぐる「リスペクタビリティを受容した労働者」と「そうでない者」という二分法が招いた問題構成を意味する．しかしながら，本稿で検討してきたようにポピュラー・ソーシャルワークに登場した「民衆」は，ラフ rough と形容できるのだろうか？という疑問が生じる．というのも，労働者の生活状況や政治意識がどのような「福祉」を望ましいものとして利用する／参加するのか，利用／参加することを通じてどのような世界に価値を見いだし生きようとしたのか，彼ら自身がこの「リスペクタブルか，ラフか？」の境界線上を往来している存在だからである．換言すれば，仮に本稿に登場する「民衆」が当時の主流化した福祉供給主体を利用できない／利用しようとしない「ラフ」であると（仮に「リスペクタブルな労働者たち」から）名指しされたとしても，名指しされた側からすれば当然ながらその指示に価値を見出せない，単なる迷惑な話であり，名指しされた者たちのアイデンティティを顧慮しない，特定の階級による別の階級への差別的な態度の表現ということになる．

つまり，民衆階級が自由主義的な資本制の枠組み（市民社会）を批判し，これに挑戦すると，その政治的な目標（労働時間短縮・賃金上昇・社会福祉サービスの量的質的要求など）が何であれ，資本と国家はこれを抑圧する動きを見せ，挑戦者たちの行為を彼らにとって都合の悪い，資本制的生産関係の秩序を乱す体制転覆者として「表象／名指しする」のである[30]．この点，先のトムスンの洞察は，再び引用するに値する．

「いかなる社会的錬金術によって，労働節約のための発明が，悲劇を生み出す機械装置になったのか．凶作といった生の事実は，人間の選択を超えているようにみえる．しかし，事実が結果として出てくるのは，人間関係のある一定の複合体，つまり法や所有制度や権力を通じてなのである．『景気循環の強力な干満』といった大げさな言い回しに遭遇したときには，われわれは用心

しなければならない．というのは，この景気循環の背後には，ある種の財産没収（地代，利子，利潤）を助長しながら，ほかの財産没収（窃盗，封建的な賦課金）については非合法としたり，ある種の対立（競争，戦争）を合法としながら，ほかの対立（労働組合，食糧暴動，民衆的な政治組織）は禁止するという，社会関係の構造――将来の人びとの目には野蛮で短命なもののように映るかもしれない構造――があるからである」（Thompson1980=2003: 239-240）

注

1　ここでいう現代のマルクス主義（史観）とは，ロシア・マルクス主義（≒スターリン主義）によって定式化され，1950 年代から世界的に影響力をもった「経済還元主義」的なマルクス主義理解（今村（2005: 19-30）のいうマルクス理解の第一類型たる「経済中心史観＝反映論」を基軸とする「唯物史観」）とは異なる「行為主体性 agency（人間が自由に行動する能力）と構造 structure（その自由を形作り／制約する要因）の間のより複雑な関係を想定した」（Ferguson 2013: 197）古典的マルクス主義 Classical Marxism の伝統を指している．「古典的」という形容詞が日本ではしばしば「経済還元主義」的なマルクス主義と同一視され，現在のマルクス（経済学）研究においても，主流的な理解を占めているようにみえる（青木 2007; 松尾・橋本 2016;　稲葉 2018）．しかし，ファーガスンらは明確に両者を区別している．なおマルクス主義に限らず，その思想を研究対象にしている研究者がその思想そのものを必ずしも信奉しているとは限らない（例えば Marxist と Marxian の違い）（Bershey 2004=2007）が，ポピュラー・ソーシャルワーク研究者は自身をマルクス主義者であると自己同定している（Ferguson et al., 2002; Ferguson et al., 2018）．

2　ラヴァレットが編集した Radical Social Work Today（2011）の翻訳版（2023: 179-180）では，popular social work を「民間のソーシャルワーク」と訳している．しかし本稿で検討するように，英国の（下層）労働者／従属階級による「ラディカリズムの伝統」に即した主体性（Hoggart 1957=1974; Thompson 1968=2003; Thompson 1991; Kaye 1983=1989; Lin 1993=1999 ら）とこの社会福祉実践の基層部分に連続的な側面を見出せるとすれば，例え暫定的であっても「民衆の／民衆によるソーシャルワーク（社会福祉実践）」と翻訳することがより正確であると思われる．確かに当時の「市民社会 civil society」の領域で福祉活動を実施した諸主体は「民間団体」と形容されうるものではあったが，本稿で取り上げるポピュラー・ソーシャルワーク実践の目的・方法らは，慈善組織協会（COS）の中核的な思想（「支援に値する／値しない」）や，複合史研究のいう「福祉ボランタリズム」団体が実施した活動内容と異なったベクトルと内実を示しており，「民間」と翻訳すると両者の概念的な区別が不鮮明になるからである．本稿の目的の一つは，この点を明瞭にするように努めることである（第 3 章参照）．

3　この点は，今日においても大きく変化していないことに留意すべきである．例えば後期近代社会（ポスト福祉国家期たるリキッド・モダニティ）の社会理論を研究するジョッグ・ヤングも，貧困層の直面する社会的排除に対する包摂（介入）は，それがリベラル的なアプローチ（employability の向上を目指す職業訓練やアクティベーション）であったとしても，貧困者の社会階層間移動を促進できないようなものである限りは「代償的な救済」に過ぎず，結局のところは「他者化 Othering」を促進してしまうと捉えている（Young, 2007=2008 ／ 2019）．この点の様相とソーシャルワークの関係については，拙稿（伊藤 2009）も参照．

4　この典型例が C. ブースや S. ラウントリーによる「自由主義的貧困観」の相対化＝「社会的貧困観念」の構想である（毛利 1990: ch.2）．

5　産業革命を世界でいち早く成立させ「労働者階級」が量的にも最も早く形成された英国でなぜマルクスのいう「プロレタリアート（対自的階級）」の出現が大陸（フランス，ドイツなど）と比べてなかなか見いだせなかったのか？その理由の一端は，チャーチスト運動の瓦解にあるといえよう．この点

木村（1967：12-14）は「チャーチズム瓦解後の国教＝キリスト教社会主義にみちびかれた［18］50年代をふくめて30年間もの最もひろい意味での社会主義思想の真空地帯が生じそれを埋めるかのようにlib-lab時代が展開したことは周知のとおりで，しかもようやくその後に到来した「社会主義の復興」も，全体としては鈍重きわまるかにみえるプロレタリアートの反応のために，逆に淘汰され，ブルジョア社会主義［≒フェビアン社会主義］だけが残り，敬震な労働者政党しか成立しな」かったと総括している．とはいえ一般的に英国ではマルクス主義的な社会主義はポピュラリティを獲得できなかった．この点の詳細は，安川（1982），大内・川端（2014）によるウィリアム・モリスの社会主義に関する解説などを参照．

6　1920年～30年代の失業問題をめぐる労働運動の動向をこうした視点から整理したものとして，Penketh and Pratt（2000）がある．

7　とはいえ，このような歴史解釈には異論もある．山本（2020: 32-33）によれば，新組合主義の文脈においても，港湾臨時日雇い労働者組合でさえ請負制をなくして労働代表制に置換することで不公正と腐敗をなくし，実質的に常勤雇用の幅を拡げる運動を展開し，自身をリスペクタブルに位置づけラフを放逐する戦術を採用したという．つまり労働者の急進主義においても労働者自身の自己同定を巡ってこの概念が浸透していたという．この枠組みから外された「非リスペクタブルな労働者」としてのラフ（？）は慈善に流れたが，そこでは「救済に値する／しない」という選別の必要性が叫ばれたのである．「リスペクタブルかラフか？」を巡る境界線上の問題は，この時期の政治思想の主体像を巡る一大論点である（第3章参照）．

8　ただしこのこと自体は戦後の国家福祉体制の成長の結果であることに留意する必要もあるし，国家福祉が労働者階級の生活水準をある程度は向上させた側面も否定できない．

9　英国におけるこの抑圧的で管理的なソーシャルワークの動向については，拙稿（伊藤 2006; 2009; 2019）も参照されたい．

10　ジョーンズ（2007: 190-193）は，次のように1950年代のソーシャルワーク史を評価している．E. ヤングハズバンドのようなソーシャルワーク「専門職化」の推進者が，貧困と不平等に関する非常に個人的な見解と一致する知識基盤を維持するために，発展途上の社会科学（社会学や社会政策学）をふるいにかけて選別した．このことがソーシャルワーク理論の「折衷主義」に反映され，個人主義的で家族病理的な視点に傾倒する者だけが高等教育コースに参加できるようにする入学選抜システムの路を開いた．そのコースで強調されたことは，クライエントには価値がなく，その欠点にもかかわらず，無防備なソーシャルワーカーを操り，ねじ伏せることができるという（COSと同様の）前提認識であったという．この批判から1970年代にラディカルなソーシャルワークが興隆するのである（Ferguson 2008=2012; Lavalette 2011=2023）．

11　ラヴァレットら（Jones and Lavalette 2013: 147-8; Lavalette 2019: 536-7）は，イスラエル統治下のパレスチナ難民キャンプという「コミュニティ」での民衆自身による社会福祉実践に触れ，その創造的な内実に感銘を受けたこと，こうした活動の現在性や歴史的な事例を掘り起こすことの必要性からポピュラー・ソーシャルワークに関する論文を着想・執筆しBritish Journal of Social Work誌へ投稿したところ，掲載を却下されるという驚くべき体験をしたという．その理由は，査読者がポピュラー・ソーシャルワークの内実は，専門的な資格を持つソーシャルワーカーによる活動ではないので，「本当のソーシャルワークではない」とコメントしたことにあった．

12　蛇足ながらラヴァレット編著の翻訳版（2011 = 2023: 176）では，主流の「ソーシャルワーク」を正当化した歴史観／記述を「保守党的（Whiggish）」と訳しているが，この訳語は正確であろうか．「ホウィグ（主義）的」とは，19世紀後半以降の近代主義（啓蒙）的／進化論的進歩史観を直接的には意味しており，そこにはどう考えても「保守党的（Tory/ism）」というニュアンスは含意されていそうにない（伊藤 2022）．むしろWhiggishは，自由党社会改良（liberal reform）やフェビアン主義のテクノクラシー論との関係が強い思想である．ここでラヴァレットらが言いたかったことは，主流のソーシャルワーク史が「今日の支配的なモデルとソーシャルワーク実践の解釈に向けた歴史的発展の

単純な物語」＝進歩史観（Whiggish historiography）によって描かれているため，かえって多様なポピュラー・ソーシャルワークの形態を歴史の舞台からを消し去ってしまい，そうした表象が，「公式のソーシャルワーク史」にある種の保守性（conservativity）を付与してしまうというニュアンスではなかろうか．

13　現代においても過去30年以上にわたってソーシャルワークコースを無力化してきた多くの変化に立ち向かえなかったソーシャルワーク研究者たちが，彼らの思い描くような国家と共存するソーシャルワーク教育をなんとしても守りたいと考えており，さらにいえば，自分たちの［研究者としての］生活を不愉快にするような批判的な内容［批判的なソーシャルワークの実在性と言説］を排除することに満足しているのである．「驚くに値しないが，こうした学者の多くは，ソーシャルワークの批判的核心を無視し，隠し，ラディカルな奇癖として疎外することに喜びを感じているのである」（Jones 2007: 193）

14　ファーガスンやラヴァレットが紹介しているのは以下のような人物たち（**シルビア・パンクハースト Sylvia Pankhurst，ジョージ・ランズベリー George Lansbury，クレメント・アトリー Clement Atlee，エメリン・ペシックとメアリー・ニール Emeline Pethick & Mary Neal** など）による英国内での社会福祉実践である（Ferguson and Lavalette 2007; Ferguson and Woodward 2009; Lavalette and Iokimidis 2011=2023; Jones and Lavalette 2013; Lavalette 2017; Lavalette 2019; Johnson 2000; Lavalette 2006; 伊藤 2000a; 2000b; 2017; Atlee 1920）がこの詳細は，別稿で論じる．

15　ジョーンズは，1970年代にソーシャルワーク教育で紹介されていた歴史上の人物として，「［19世紀のCOSメンバーかつ住宅問題を扱った］オクタビア・ヒルから［20世紀半ばの『英国ソーシャルワーク史』を描いた］アイリーン・ヤングハズバンド」が「選ばれた英雄やヒロインとして描かれ［た］」としている．また研究レベルでは，パールマンやバイスティックの著作が取り上げられていたが，その内実は「単調で素朴な」記述であり，E.P.トムスンやE.ホブズブーム，G.ステッドマン・ジョーンズ（いずれも当時の著名なマルクス主義歴史家）による記述と比べると，単線的な進歩主義，すなわち「ホウィグ主義的な歴史観」に依拠していたと指摘している（Jones 2011=2023: 55; 61）．

16　この点は，拙稿（伊藤 2019）にあるファーガスンの主張（Ferguson 2011b）を参照されたい．その含意は，同じ「集合的 collective」アプローチを採用したとしても，ビスマルク的なものやフェビアン的な専制的／テクノクラート的な社会福祉供給の様式があり，それはポピュラー・ソーシャルワークのいう民衆主体の「下から」の集合的アプローチと異なっているからである（Ferguson 2000も参照）．

17　ここでは，ナチスやフランコ，ギリシャ，旧東欧，南米などの政治的独裁体制下でソーシャルワークが果たした「恐ろしい歴史 horrible histories」が紹介・分析されているが，そのような恐ろしい歴史が生まれた要因は，ソーシャルワークの政治的性質を捨象して「中立的な専門職」としての活動や表象があったからに他ならない，というのが彼らの主張である（Ferguson et al. 2018.ch.4）．

18　ジョーンズとノヴァクのいう「民衆福祉 popular welfare」とラヴァレットらがいう「民衆の社会福祉実践 popular social work」はほぼ同義である．

19　実際にCOSやセツルメントの掲げる自助概念に疑問を持つことから，ポピュラー・ソーシャルワークを牽引した人たち（パンクハースト，ランズベリー，アトリーら）も出発している（Lavalette 2019: 541）．

20　言うまでもないが，この「もうひとつの社会とソーシャルワークは可能である」というテーゼは，現行の国家福祉や専門職の在り方を自明としないという意味で，現代においても当てはまる（Ferguson and Lavalette 2005; Ferguson 2008=2012）．

21　19世紀半ばの炭鉱労働者に関するある報告書には，「鉱山労働者のための学校，高校，日曜学校，チャーチストの学校，読書室，そして老若男女，文学者と文芸者が一緒になって勉強するような取り組みまで，様々な形の労働者階級の自己教育が独立して行われていた．これらの学校は，既成の協会，慈善家，国家が及ぼそうとした影響から完全に独立しており･･･『人びと［民衆］の教育は人びと自

身の手の中のみ安全である』という本質的な信念を体現していた」と記されている．これに対して中産階級は労働者の主張にあった無神論，土地の国有化要求運動などを前にして「自分たちの近くに，まるで別の土地に住み，別の言語を話し，会話したこともなく，実際に見たこともないような，まったく無知な社会があるのではないかという疑念さえ抱いた」ので「この大きな危険，大きな悪に対抗するにはある方法しかない ••• 賢明で善良な人びと［respectable な中産（市民）階級］が ••• 有益な教育［ブルジョア的なそれ］を人びとに供給すること」である．1870 年の初等教育法（10 年後に義務化）はこうして導入され，労働者階級の自己教育のもたらす潜在的な脅威を破壊していったのである（cited in Jones and Novak 2000: 43-44）．

22　注 3 で触れたヤングの指摘とは対照的に，ポピュラー・ソーシャルワークは，端的に「他者化」をしない／代償的な救済をしないという意味である．なぜならニーズを民衆自らが定義し，それを実現する過程を自らがコントロールする意志や姿勢を持っているからである．

23　この点に関連してファーガスンとウッドワード（Ferguson and Woodward, 2009:20-21）は，次のように指摘している．セツルメントでさえも COS と同様に「その目的は，能動的な市民活動を通じて社会の調和を図ることにあった」とし，「キャノン・バーネットのような思想家の主要な関心は，労働者階級のより尊敬できる respectable 部分を社会改良に関わる議論に取り込むことであった」．この「尊敬できる／立派な」という部分は，「自由主義」的なイデオロギーと同義である．バーネットは，「立派な労働者 respectable working class」を取り込む対極には，「残余 residual」に対する強制介入的政策があり，また実際にそれを支持していたという．なぜなら彼は失業者の存在は，コミュニティの富と幸福を危険にさらすと認識していたからである．ただし，パウエル（Powell 2001: 34）は，COS とセツルメントは，前者の社会ダーウィン主義に基づく「貧困の科学性」の追求に対して後者が反発したことが 1885 年に両者の分裂を招き，それが後者による貧困への適切な対応としての社会改良の推進をもたらしたと理解しており，両者の関係を「実証主義とヒューマニズム」の衝突と捉えている．

24　一連の自由党社会改良政策（1906-1914）は，「労働者階級が要求した改革ではなく，実際に多くの人たちから批判的な敵意をもたれる形で取り組まれた」（Jones and Novak 2000: 46-7）のだが，それはウェッブ夫妻の社会主義政策をも反故にした（救貧法に関する「少数派報告」はほぼ無視された）のである．

25　本稿の注 2 を参照．

26　本稿の注 1 を参照．

27　これらは「インターセクショナリティ intersectionality（交差性）」の問題として一般的に理解されているものであるが，同時に社会福祉やソーシャルワークの学術的な追求にとっても重要な問題提起になっている（Colins and Bilge 2020 = 2021; Ferguson et al., 2018）．

28　ハリー・ハルトゥーニアンによれば，安丸のいう全体性とは，「生活経験，道徳的普遍化，世界観ないしコスモロジー，狭義のイデオロギー，といった諸次元（あるいはイデオロギー表）」を指し，また安丸は「世界史を叙述するにあたってのマルクスの原則，そしてまた，ありふれた日常にひそむ尋常ならざるものについてのヴァルター・ベンヤミンの発見，その双方を満足させることに成功した」という（ハルトゥーニアン 2016: 52）．なおマルクス主義の「全体性」に関する議論の系譜については，Jay（1984=1993）を参照．

29　とはいえ，こうした色川の言明（階級概念を経済的利害に特化したものが反映されたものと見なすこと）には，おそらく E.P. トムスン，ラヴァレットやファーガスン（Thompson 1968=2003; Ferguson 2000; Ferguson et al., 2002; 2018; Ferguson 2011a=2023）からの異論が提出されるかもしれない．トムスンの階級概念は，すでに触れたように，経済還元主義史観を克服するために提起されたものであり，地域性を基盤にして労働者の持つ文化的なアイデンティティ（より正確には経済的利害を同定するにも広い文化的な観念を要する）を紐帯にしながら資本制の専制へ抵抗する関係性や過程を示すものであったし，そうした労働者の階級文化はポピュラー・ソーシャルワークの構成要素でもあるから

だ．

30　そのような「名指し」や「表象」を「歴史として語り／記述する」のは，なによりも歴史家／研究者であることを私たちは忘れるべきではない．ここで改めて注意が必要になるのは，歴史に登場するエージェンシーやアクターの，或いはそれを研究する学徒の，階級的な／イデオロギー的な立場によって，同じ歴史的証拠や現象の受け止め方が異なることであり，それは必然的に歴史の構成とその解釈・評価に反映される点である（Jenkins 1991=2005: 28-33; 69; 76; 87-92）．例えば，一方で複合史研究は，友愛組合や協同組合への加入率の高さを以て当時の労働者が「『自立』している『市民』であるというプライド」を持った証拠だと捉えている（高田・中野編 2012: 70-71）．これは第 1 章で述べた小関や山本のいう「リスペクタビリティ」の受容の結果到達した（男性基幹）労働者階級の自己同定のことを指していよう．彼らがこうした自立観（自助概念）に自尊心を持った史実は認める必要があるだろう．そしてそのことは，市民としての労働者階級による反国家福祉的態度を表していることだろう．しかしながら同時に，他方でジョーンズとラヴァレット（2013: 155）は，1912 年の段階での友愛組合の会員がもろもろの計算を踏まえて推計 1600 万人いたことを指摘しつつも，「この数字に加えて，地元の未登録協会に寄付している人や，葬儀，病気や怪我，失業，ストライキなどの際に組合費でカバーしている人もいたはずである」と述べている．ポピュラー・ソーシャルワークの研究者たちにとっても，この数値が労働者の反国家福祉的な態度を示したものとして解釈されてはいるのである．しかし，この場合の両者が指し示す労働者像は同一ではない可能性が高いことは，ジョーンズとノヴァクのいう「民衆福祉」の記述からも明らかである．

文献

青木孝平（2007）『コミュニタリアン・マルクス　資本主義批判の方向転換』社会評論社

Anderson, P.（1980）, *The Arguments within the English Marxism*, London: Verso.

Atlee, C.R.（1920）, *The Social Worker*, London: Heinemann.

Banks, S.（2012）, *Ethics and Valves in Social Work,* 4th editi, London: Palgraie, Macmillan（＝伊藤文人ほか監訳（2016）『ソーシャルワークの倫理と価値』法律文化社）

Bershey, E.A.（2004）, *The Social Science in Modern Japan: The Marxian and Modernist Traditions*, Barkley and Los Angels, London: University of California Press.（＝山田鋭夫（2007）『近代日本の社会科学　丸山真男と宇野弘蔵の射程』NTT 出版）

Collins, P.H. and Bilge, S.（2020）, *Intersectionality*, 2nd edit, Cambridge: Polity Press.（＝小原理乃訳・下地ローレンス吉孝監訳（2021）『インターセクショナリティ』人文書院）

Ferguson, I.（2000）, ‘Identity politics or class struggle?: The case of the mental health users’ movement’ in Lavalette, M. and Mooney, G.（eds）*Class Struggle and Social Welfare*, London: Routledge, pp.228-249.

Ferguson, I.et al.,（2002）, *Rethinking Welfare: A Critical Perspective*, London: Sage.

Ferguson. I. and Lavalette, M.（2005）, ‘Another social work is possible: social work and the struggle for social justice’ in Ferguson et al.（eds.）, *Globalisation, Global justice and Social work*, London: Routledge, pp.207-223.

Ferguson, I. and Lavalette, M.（2007）, ‘Social Worker as Agitator: The radical Kernel of British social work’ in Ferguson, I. and Lavalette, M.（eds）, *International social work and the Radical Tradition*, Birmingham: Venture Press, pp.11-31.

Ferguson, I.（2007）, *Reclaiming Social Work: challenging Neoliberalism, promoting social justice,* London: Sage.（＝石倉康次ほか監訳（2012）『ソーシャルワークの復権　新自由主義への挑戦と社会正義の確立』クリエイツかもがわ）

Ferguson, I and Woodward, R.（2009）, ‘The radical kernel’ in *Radical Social Work in practice: making a difference*, Bristol: Policy, pp.13-32.

Ferguson. I.（2011a），‘Why class（still）matters’ in Lavalette, M.（ed）*Radical Social Work Today: social work at the crossroads*, Bristol: Policy, pp.115-134.（＝「なぜ今も階級が問題なのか」深谷弘和・中野加奈子ほか監訳（2023）『現代のラディカル・ソーシャルワーク　岐路に立つソーシャルワーク』クリエイツかもがわ，pp.151-174.）

Ferguson, I.（2011b），‘Individualism, Collectivism and Social Work’ a paper presented at the conference in *the Impact of New Public Management Policies and Perspectives on Professional Social Work: the Comparative Experience in Japan and the UK*.

Ferguson, I.（2013），‘Social Workers as Agents of Change’ in Gray, M. and Webb, S.（eds）*the New Politics of Social Work*, London: Palgrave Macmillan, pp.195-208.

Ferguson, I et al.（2018），*Global Social Work in a political context: Radical Perspectives*, Bristol: Policy.

深貝保則（2009）「ウェルフェア，社会的正義，および有機的ヴィジョン　ブリテン福祉国家の成立前後における概念の多元的諸相」小野塚知二編『自由と公共性　介入的自由主義とその思想的起点』日本経済評論社，pp.253-284

Garett, P.M.（2018），*Welfare Words: critical social work and social policy*, London: Sage.

長谷川貴彦（2016）『現代歴史学の回顧と展望　言語論的転回をこえて』岩波書店

ハリー・ハルトゥーニアン／佐野智規訳（2016）「歴史的現在の要求，歴史家の使命への挑戦　安丸良夫の批判的実践の射程」『現代思想（総特集　安丸良夫　民衆思想とは何か）』（2016 年 9 月臨時増刊号）Vol.44-16, pp.46-53.

Hoggart, R.（1957），*The Uses of Literacy: Aspects of Working Class life*, London: Pelican.（＝香内三郎訳（1974）『読み書き能力の効能』晶文社アルヒーフ）

伊藤文人（2000a）「ポプラリズム　戦間期イギリス公的扶助形成過程の一端として」『社会福祉学』40 巻 2 号，pp.227-243.

伊藤文人（2000b）「1920 年代イギリス労働党地方自治体における救貧政策　ポプラリズムとその社会的余波」『社会事業史研究』第 28 号，pp.65-76.

伊藤文人（2006）「包摂の実践者か，排除の尖兵か？イギリスにおける脱専門職化するソーシャルワーク」『現代と文化』第 113 号，pp.123-141.

伊藤文人（2009）「ソーシャルワークと近代社会　ジグムント・バウマンの社会理論を手がかりにして」『現代と文化』第 120 号，pp.1-33.

伊藤文人（2017）「ポプラリズムとレイバー・ガーデイアンズ　救貧法改革とラディカル・ソーシャルワーク」『社会福祉論集』137 号，pp.1-23.

伊藤文人（2019）「グローバリズム／ラディカルソーシャルワーク／ SWAN」金子光一・小舘尚文編著『新世界の社会福祉 1　イギリス，アイルランド』旬報社，pp.85-117.

伊藤文人（2022）「『社会福祉発達史』研究の射程と展望（その 2）――『福祉の複合史研究』のもたらしたもの」『現代と文化』第 145 号，pp.23-50.

稲葉振一郎（2018）『新自由主義の妖怪　資本主義史の試み』亜紀書房

今村仁司（2005）『マルクス入門』ちくま新書

Jay, M., *Marxism and Totality: the Adventures of a Concept from Lukacs to Habermas*, Barkley and Los Angeles: University of California Press.（＝荒川幾男・今村仁司ほか訳（1993）『マルクス主義と全体性　ルカーチからハーバーマスへの概念の冒険』国文社）

Jenkins, K.（1991/2003），*Re-thinking History: With a new preface and conversation with the author by Alun Munslow*, London & New York: Routledge.（＝岡本充弘訳（2005）『歴史を考えなおす』法政大学出版局）

Johnson, A.（2000），‘The making of a poor people’s movement: a study of the political leadership of Poplarism 1919-1925’ in Lavalette M. and Mooney, G.（eds），*Class Struggle and Social Welfare*,

London: Routledge,pp.96-116.

Johnson, P.（1985）, *Saving and Spending: The working-class Economy in Britain 1870-1939*, Oxford: Oxford University Press.（＝真屋尚生訳（1997）『節約と浪費　イギリスにおける自助と互助の生活史』慶応大学出版会）

Jones, C. and Novak, T.（2000）, 'Class Struggle, self-help and popular welfare' in Lavalette M. and Mooney, G.（eds）, *Class Struggle and Social Welfare*, London: Routledge, pp.34-51.

Jones, C.（2007）, 'What to be done' in Lavalette, M. and Ferguson, I.（eds）, *International Social Work and the Rradical Tradition*, Birmingham: Venture Press, pp.189-195.

Jones, C. and Lavalette, M.（2013）, 'The Two Souls of Social Work: exploring the roots of popular social work' in the *Critical and radical social work*, Vol.1-no2,pp.147-165.

Jones, C.（2011）, 'The best and worst of times: reflections on the impact of radicalism on British social work education in the 1970s' in Lavalette, M.（ed）, *Radical Social Work Today: social work at the crossroads*, Bristol: Policy, pp.27-44.（＝「最良で最悪の時代――1970 年代におけるイギリスのソーシャルワーク教育に対するラディカリズムの影響についての考察」深谷弘和・中野加奈子ほか監訳（2023）『現代のラディカル・ソーシャルワーク　岐路に立つソーシャルワーク』クリエイツかもがわ，pp.51-70）

Kaye, J. Harbey（1984）, *The British Marxist Historians*, London: Palgrave Macmillan.（＝桜井誠監訳（1989）『イギリスのマルクス主義歴史家たち　ドップ，ヒル，ヒルトン，ホブズブーム，トムスン』白桃書房）

木村正身（1967）「（学会展望）イギリス社会主義思想」『経済学史学会年報』通巻 5 号，pp.12-19.

小関隆編（2000）『世紀転換期イギリスの人びと　アソシエイションとシティズンシップ』人文書院

Lavalette, M. and Mooney, G.（2000）'Introduction: Class struggle and social policy' in Lavalette M. and Mooney, G.（eds）, *Class Struggle and Social Welfare*, London: Routledge, pp.1-12.

Lavalette, M.（2006）, *George Lansbury and the revel councillors of Poplar*, London: Bookmarks.

Lavalette M. and Iokimidis, V.（2011）'International social work or social work internationalism?: Radical social work in global perspective', in Lavalette, M.（ed）, *Radical Social Work Today: social work at the crossroads*: Bristol: Policy, pp.135-152.（＝「国際ソーシャルワークか，ソーシャルワークの国際協力か――ラディカル・ソーシャルワークをグローバル視点で捉える」深谷弘和・中野加奈子ほか監訳（2023）『現代のラディカル・ソーシャルワーク　岐路に立つソーシャルワーク』クリエイツかもがわ，pp.175-193.）

Lavalette, M.（2017）, 'Sylvia Pankhurst: Suffragette socialist, anti-imperialist, and social worker?' in *the Critical and radical social work*, vol.5,no-3, pp.369-381.

Lavalette, M.（2019）, 'Popular Social Work' in Webb, S.（ed）*The Routledge Handbook of Critical Social Work*, London: Routledge, pp.536-548.

Lin, C.（1993）, *The British New Left*, Edinborough: Edinborough University Press.（＝渡邊雅男訳（1999）『イギリスのニューレフト　カルチュラル・スタディーズの源流』彩流社）

MacWilliam, R.（1998）, *Popular politics in nineteenth century England*, London: Routledge.（＝松塚俊三訳（2004）『十九世紀イギリスの民衆と政治文化　ホブズボーム・トムスン・修正主義をこえて』昭和堂）

Marshall, T.H. and Bottmore, T.（1950/1993）, *Citizenship and Social Class*, London: Pluto Press.（＝岩崎信彦／中村健吾訳（1993）『シティズンシップと社会的階級　近現代を総括するマニュフェスト』法律文化社）

松尾匡／橋本貴彦（2016）『これからのマルクス経済学入門』筑摩書房

宮本孝二（1998）『ギデンズの社会理論　その全体像と可能性』八千代出版

毛利健三（1990）『イギリス福祉国家の研究　社会保障発達の諸画期』東京大学出版会

Morris, W. and Bax, E. Belfort（1893）, *Socialism: Its growth and Outcome*, London: Swan Sonnenschein & Co.（＝大内秀明監修・川端康雄監訳（2014）『社会主義　その成長と帰結』晶文社）
中谷いずみ（2013）『その「民衆」とは誰なのか　ジェンダー・階級・アイデンティティ』青弓社
大沢真理（1986）『イギリス社会政策史　救貧法と福祉国家』東京大学出版会
小野塚知二（2009）「介入的自由主義の時代――自由と公共性の共存・相克をめぐって」小野塚知二編『自由と公共性　介入的自由主義とその思想的起点』日本経済評論社，pp.1-39.
岡田東洋光・高田実・金澤周作編（2012）『英国福祉ボランタリズムの起源　資本・コミュニティ・国家』ミネルヴァ書房
Penketh, L. and Pratt, A.（2000）, ‘The “two souls of socialism”: the labour movement and unemployment during the 1920s and 1930s’ in Lavalette M. and Mooney, G.（eds）, *Class Struggle and Social Welfare*, London: Routledge, pp.117-138.
Powell, F.（2001）, *The Politics of Social Work*, London: Sage.
Scott, J.W.（1988/2018）, *Gender and the Politics of History*, 30th anniversary edit, Colombia University Press.（＝荻野美穂訳（2020）『［30 周年版］ジェンダーと歴史学』平凡社）
高田実（2001）「『福祉国家の歴史』から『福祉の複合史』へ　個と共同体の関係史をめざして」『福祉国家の射程』（社会政策学会誌第 6 号）pp.23-41.
高田実（2009）「ニュー・リベラリズムにおける『社会的なもの』」小野塚知二編『自由と公共性　介入的自由主義とその思想的起点』日本経済評論社，pp.81-116.
高田実・中野智世編（2012）『福祉　近代ヨーロッパの探求⑮』ミネルヴァ書房
高田実（2017）「福祉の歴史学」歴史学研究会編『第 4 次現代歴史学の成果と課題Ⅰ　新自由主義時代の歴史学　2001-2015』績文堂書房，pp.228-253.
Thompson, E.P.（1963/1980）, *The Making of the English Working Class*, London: Penguin.（＝市橋秀夫・芳賀健一訳（2003）『イングランド労働者階級の形成』青弓社）
Thompson, E.P.（1991）, *Custom in Common*, Wales: Merin Press.
安川悦子（1982）『イギリス労働運動と社会主義』お茶の水書房
山本卓（2020）『二十世紀転換期イギリスにおける福祉再編　リスペクタビリティと貧困』法政大学出版局
Wood, E.M.（1995）, *Democracy and Capitalism: Renewing Historical Materialism*, Cambridge: Cambridge University Press.（＝森川辰文訳・石堂清堂監訳（1999）『民主主義　対　資本主義　史的唯物論の革新』論創社）
Young, J.（2007）, *The Vertigo of Late Modernity*, London: Sage.（＝木下ちがや・中村好孝・丸山真央訳（2019）『後期近代の眩暈　排除から過剰包摂へ［新装版］』青土社／初版は 2008 年）